世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

An Examination of Shin Propagation in Terms of Legendary Stories Told About Shinran

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): Shinran, Shin Buddhist Propagation, Twenty-Fourth Disciple of Shinran, Legendary Stories Told About Shinran 作成者: 南條, 了瑛 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/867

An Examination of Shin Propagation in Terms of Legendary Stories Told About Shinran

NANJO Ryoei

Key words

Shinran / Shin Buddhist Propagation / Twenty-Fourth Disciple of Shinran / Legendary Stories Told About Shinran

Summary

I will consider the legendary stories told regarding Shinran that was used throughout the Kanto region for propagational efforts.

This legend is that Shinran recited Namo Amida Butsu to save a woman who transformed into a big snake because of her attachment.

I cosider how significant in terms of Shin propagation that the legendary stories which spreads through Kanto region in Edo era.

近世真宗伝道の一考察

――東国における大蛇済度譚――

南　條　了　瑛

近世真宗伝道の一考察
――東国における大蛇済度譚――

南條了瑛

〈キーワード〉真宗伝道／二十四輩／親鸞像／大蛇済度

はじめに――研究の主眼と方法

浄土真宗の伝道（以下、真宗伝道）は多くの場面で成立し得る現象であるため、その研究もまた多岐にわたり、これまでの真宗伝道の研究が、必ずしも学問として体系化しているとは言い難い。[1]

このことから、近年において、真宗伝道の方法論の構築が必要であると言われ、そしてまた、真宗伝道学の研究方法について論じられることも多くなった。これまでの真宗伝道に関する代表的な研究方法論は、次の二点に集約できると考えられる。

(1)親鸞（一一七三～一二六三）の教義から伝道の原理・理念を導出する方法[2]

(2)過去の具体的な個別事象を分析し、伝道理論を構築する教学的な方法[3]

(1)は、親鸞教義から自ずと導き出される伝道のありかたを考察する視点である。この視点は教義自体が歴史

的・社会的状況に対して普遍的に妥当するものである故に、時代や場所からの影響をあまり受けることがない。しかし、臨床的分析が無いため、抽象的な議論に限られて、実際の個々の事象において生じる伝道現場の実態との乖離が生じやすいともいえよう。

(2)は、実際に伝道が成立した現場で起こった過去の事象を考察し、その時代や場所に特化した伝道理論を構築する教学的（教義解釈的）な視点である。親鸞教義と縁遠い者が何を求めているのか、また念仏者[4]がその特殊な事象の中でどのように伝道を成功[5]させたかを観察することで、その時代や場所に特化した伝道理論が生み出される。(2)の視点だけでは、教義的な基礎を持たない理論が生成される危険性があるが、より実践的な伝道論となる。

これまでの真宗伝道に関する研究論文は、(1)に関するものがほとんどであり、(2)まで視野に入れた研究は決して多いとはいえない。さらに浄土真宗本願寺派では、「外部伝道（信仰と縁遠い他者へのアプローチ）」の重要性が語られて久しく、その研究がこれまで不十分であったことが指摘されている[6]。机上の空論で終わらない実践的な伝道論の構築が求められているにも関わらず、いまだ十分な成果がみられないのが現状といえよう。

以上の経緯を踏まえ、本研究は、実際に伝道が成立した現場で起こった個々の事象を考察することを目的とする。つまり、教義から伝道への方向性ではなく、伝道の現場から、伝道の理論を構築していくという方向性で論じる。過去に起こった伝道の成立過程が考察され、それらの研究が蓄積されれば、未来の伝道がどうあるべきかについても一定の成果を与えることができると推察されるのである。

さて、過去の真宗伝道事情のなかで、真宗寺院に訪れる人々に注意してみると、時代を問わず、その訪問者は、宗教的巡礼者や娯楽的観光客が混在している。この巡礼者や観光客が混在する状況下で、真宗寺院に関係する念仏者が親鸞教義あるいは親鸞という一人の宗教者を魅力的に語ることで、伝道が成立する場合が多くみ

られる。とりわけ旅が隆盛した近世の東国（主に現在の北関東）地域においては、二十四輩寺院[7]を取り巻く念仏者が、親鸞という宗教的人物を柔軟に語っており、その伝承[8]が真宗信仰と縁遠かった旅人の心情を燻り、真宗と接する機会を得ている。

真宗の伝承に関する研究については、塩谷菊美[9]、草野顕之[10]の研究をはじめ、最新では、大澤絢子[11]が論じている。これらの研究は教団が正当な親鸞教義を提唱する一方で、現場での「語り」によって布教伝道の場が持たれ、親鸞像が展開していくという点は、真宗のみならず宗祖像を考える際に重要だと考える視点が含まれている。ここでいう「語り」は、宗祖を「讃える」ということが一要素として存するので、宗祖を称賛するために、必然的に伝説的な内容を伝承することが往々にして起こる。この伝説的要素を含む伝承の研究は、伝道を考える上で決して見過ごすことはできないだろう。例えば、末木文美士は、近代的な親鸞研究は、実証主義の方法を用いて大きな成果を上げた一方、伝説的な要素を排除し、信頼できる同時代の第一次史料に基づき、合理的な検討によって歴史的事実を確定しようとする方法が、今日行き詰まりを見せていると指摘している[12]。

真宗における伝説的内容を含む伝承のうち、近世東国における真宗伝承を一瞥すると、ときに親鸞教義から逸脱するものも少なくない。そのためか、真宗学において、伝承に関する先行研究がほとんど存在しない。これは、一見荒唐無稽な伝承を単なる創り話として研究対象の埒外に位置づけてきた歴史が想起される[13]。しかし今後は、真宗や親鸞あるいはその門弟がいかに社会で語られてきたか、その形成と成立過程を探る作業が、民衆と真宗とのリアルな関わり方を知る上で必要になってくると考えられ、ひいては真宗伝道学に資する研究となり得るといえよう。

近世東国の真宗に関する伝承について、先駆的な研究をしているのは、今井雅晴である[14]。今井雅晴は、史実と伝承を峻別したうえで、歴史学の立場から東国での親鸞伝承を考察している。こうした親鸞がいかに語られ

てきたかについての研究は、今後は歴史学の立場からの考察のみにとどまるものではなく、より学際的に行うべきである。

そこで本研究では、近世東国において頻繁に語られた「親鸞の大蛇済度譚」（以下、大蛇済度譚）に着目し、この伝承が近世における真宗の布教伝道にとってどのような意義があったかを考察する。

この伝承は、執着心によって大蛇に変化した女性を親鸞が念仏（阿弥陀如来の仏力）によって救うという説話・物語であり、近世の巡拝記である『大谷遺跡録』、『遺徳法輪集』、『二十四輩順拝記』などから確認できる。[15] 特に、花見ヶ岡・蓮華寺（現在の栃木県）と、坂東・報恩寺（現在の茨城県）の縁起に詳しく説かれる。

今井雅晴は真宗寺院において語られる大蛇は「水害」や「女性」と結びつけられ、水害を象徴的に表したものであるという。[16] 本研究では、大蛇済度譚について詳細に語られている花見ヶ岡・蓮華寺と、坂東・報恩寺との両説示を比較・検討し、真宗寺院が本譚を通して伝えたかった内容を探っていきたい。

一　蓮華寺と報恩寺との大蛇済度譚の共通点と相違点

本研究の対象となる大蛇済度譚について詳細に語られている箇所は、近世巡拝記史料に記録される二つの真宗寺院（花見ヶ岡・蓮華寺と坂東・報恩寺）の縁起においてである。花見ヶ岡・蓮華寺は、現在の栃木県下野市国分寺にある浄土真宗本願寺派の寺院である。また坂東・報恩寺は、親鸞の直弟子とされる性信（一一八七～一二七五）の開基寺院として伝えられ、真宗大谷派の寺院である。創建当時は下総横曽根（現在の茨城県）に存在し、移転を繰り返した後、現在は東京都台東区にある。

本節において、蓮華寺と報恩寺に伝わる大蛇済度譚の同異をまとめてみた。

まず、相違点については、細かく述べ始めると遑がないことは言うまでもないが、概ね主人公、水害の起こった場所、大蛇の変化理由、救済の方法、大蛇の結末に違いが見られる。詳細については、以下の通りである。

【相違点】

①主人公	蓮華寺…親鸞	報恩寺…性信・性智（性信の娘）
②水害の場所	蓮華寺…「室の八島」付近の河川氾濫	報恩寺…「飯沼」付近の河川氾濫
③大蛇変化理由	蓮華寺…旦那の不倫による嫉妬	報恩寺…住居を奪われた嫉妬
④救済方法	蓮華寺…称名読誦の力	報恩寺…親鸞から授かった宝刀（龍返しの剣）の力
⑤大蛇の結末	蓮華寺…虚空に昇り菩薩となる	報恩寺…回心して怒りが鎮まる

次に、共通点は次のようにまとめられる。

【共通点】

①水害を防ぐ物語である

②大蛇に変化した女性が救済される

③神祇信仰者が阿弥陀信仰に回心する

以上の両説話における比較を踏まえ、次節より各々の場面を詳細に検討し、真宗寺院が本譚を通して伝えたかった意図を探っていくことにする。

二　花見ヶ岡・蓮華寺に伝わる大蛇済度譚

まず、花見ヶ岡・蓮華寺の縁起における大蛇済度譚を検討していく。近世後期に出版された『二十四輩順拝記』には、大蛇済度譚が詳細に説かれている。概要は、以下の通りである。

昔、嫉妬に狂った女が、夫と妾を食い殺して大蛇と化し、よどんだ川に棲む人食い大蛇として村人を苦しめていた。村人は、その蛇を鎮めるために、毎年九月八日に娘を一人いけにえとして差し出していた。ある年、大沢掃部友宗の一人娘がいけにえとなった。しかし、この地を訪れた親鸞が念仏を称えたところ、女の嫉妬は消えて極楽往生をとげ、娘は救われた。この時、天から蓮華の花がふってきたので、人々はこの地を「花見ヶ岡」と名付けた。のち、親鸞のために建てた草庵が、蓮華寺のはじまりであったと言われている。

本説話は、以下の三部構成になっている。

(1)親鸞、水害を防ぐ
(2)女性の済度
(3)神官の回心

以下、各々の場面を詳しくみていくことにする。

(1)親鸞、水害を防ぐ

『二十四輩順拝記』には、大蛇済度が行われた地として伝わる「親鸞池」について、

花見岡親鸞池〈惣社村を経て思ひ川を越大高寺村の領内丸山にあり是即花見が岡なり〉[17]

と記されている。「思ひ川」とは、この土地の西に流れる思川のことである。[18] 続いて、

偖も聖人〈時に御年四十三歳〉常州小島の郷御教化の比しも当国都賀郡総社村室の八島の神官大沢掃部友宗なるもの仄に法徳をつたへきき来り謁して申けるやう我等が在所室の八島なる近隣に一ツの深淵あり、むかしより邪神栖て人民を悩ます事大方ならず爰におひて所の者ども相ともに計て渠が暴悪を宥ん為毎歳秋の二時牲を以て（中略）これを祭るもし一時にても怠る事有時は忽ち祟りをなして人を取くらひ或は毒気を以て熱病を発せしめ今に至て人民の歎きいふばかりなし[19]

とある。ここで、説話の重要人物である大神神社の神職である大沢掃部友宗の住む地域が記されており、そのなかで「室の八島」という言葉が出てくる。「室の八島」とは、下野国府付近にある湿地帯の名所である。現在では、栃木県下野市惣社町にある大神神社の境内に小さく残っている。当時、室の八島の沼地からは、絶えず水蒸気が煙のように湧きのぼっていたので、人々はそのあたり一帯を「室」と見て、小さな島や草むらのように見えるものを総称して「八島」と呼んだという。[20] つまり、「室の八島」とは、八つの島があるという意味ではなく、たくさんの島々という意味である。

この「室の八島」の近くに、「一ツの深淵」があり、「むかしより邪神栖て人民を悩ます」と記されている。ここでいう「深淵」とは川のことであり、「邪神」とは蛇を意味する。川から生じる水害を蛇として語り、その蛇（水害）のせいで人々が困っていることが述べられる。困り果てた神官・大沢掃部友宗は、人々を悩ます大蛇（水害）について、親鸞に助けを求める。

物語の最後は、

再び牲の備へもなく邪神の災害頓にまぬがれしかば、深く念仏に帰依し専ら後世の一大事を心がけるそ殊

勝なれ[21]

とある。「邪神の災害」とは、水害を意味し、その水害を親鸞が防いだことが記してある。そして、「後世の一大事」を、念仏とともに生きよと勧めている。

このように、親鸞が水害を防ぐことを通して伝えている内容は、「深く念仏に帰依し専ら後世の一大事を心がけるそ殊勝なれ」である。すなわち、親鸞が水害を防ぐことを通して、念仏を拠り所とした生活を勧める展開となっている。

(2)女性の済度

続いて、夫と愛人との関係に嫉妬する妻が、嫉妬・執着心により大蛇へと変化し、やがて親鸞に救済されていく物語の展開となる。庶民である女性が嫉妬・執着心により大蛇（幽霊）として表現していく手法は、近世社会の理不尽な権力に立ち向かうために、講談者たちが考えたものであろう。『二十四輩順拝記』には、

妾は旧里の者なるが生得嫉妬の思ひ深く仮にも慳貪邪見にしていかり詈事常なりしかば、夫なる者これを厭ひ元来家富て何くらからぬ身なれば竊に妾をぞやしなひぬ、此妾容貌うるはしきのみならず心さま又やさしかりければ夫の寵愛大方ならず、日々に行通ふ程にさなきだに胸の火のきゆるひまなき我なるに、かかるつみごとを見もし聞もしうらみかこてるほむらの煩悩寝るまも忘るる事なく、をのづと色めにあらはして物くるはしきさまなるを夫はいよいよ疎みはて妾を見る事仇敵のごとくなれば、[22]

とある。妻は、もともと嫉妬深い性格であったので、夫の不義を知り、さらに嫉妬に狂うようになり、最後には、夫から「仇敵」と見られてしまう。その後、妻は夫を毒殺しようと試みるが、愛人にさとられ、夫から厳しく戒められる。さすがの妻も、夫より戒められた事実を恥じらい、再び夫に会っても、顔をみあわせる事が

できない。しかし、妻の怒りは限界に達し、たちまち狂乱して夫の咽に喰いつき、愛人も食い殺す。妻が狂乱して夫と愛人を食い殺す一段は、

忽ち狂乱し今は人目も慙をもしらず、唯一念の怒気凝て鬼とも成れ蛇ともなれ、いかにもして彼女をとりころし胸の焦熱をやすめんと直に側室に至つて彼女を見るよりも鬼一口に喰んとせしを……[23]

とある。ここでは、妻自らの夫に対する嫉妬心・執着心を、「鬼とも成れ蛇ともなれ」と記されている。

ところで、親鸞は『正像末和讃』にて、

悪性さらにやめがたし　こころは蛇蝎のごとくなり[24]

と、煩悩（執着心）を「蛇」として表現する。大蛇済度譚に登場する女性も、自らの嫉妬心・執着心によって悪性がおさまらないことを、「鬼とも成れ蛇ともなれ」と、「蛇蝎」のこころとして記されていることから、女性の描写が、親鸞における「蛇蝎」理解を踏襲していることが推察される。

さて、女性大蛇は親鸞によって済度されるのだが、その済度方法について、以下のように記している。

聖人の読経称名微妙の御声水面にひびき清涼として頓に我身の焦熱をさまし、苦悩を忘れ身心全く安きがごとし、しかのみならず聞法の利益浅からず、貪乱の心忽ちに翻り……（中略）……其功徳を以て即蛇身を解脱し生を転ずるに至るべしと……中略……さらは其うれしさには報謝の称名を歓ぶのみにして聊自力を頼むにあらず、偏に他力に打まかせ易行の本願ゆめゆめ疑ふ事なかれと[25]

この一段は、親鸞教義の専門用語を多用し、真宗の救済が端的に述べてある。そして親鸞による「読経・称名」による法の力によって、女性大蛇が済度される。

このように、執着心の象徴である女性大蛇が、親鸞という念仏者の読経や称名によって救済され、阿弥陀仏の本願力を讃える形式となっていることがわかる。

(3)神官の回心

女性大蛇が済度されると、蛇身を抜け出して天へ上っていくさまが記される。女性大蛇が救済されていく様子は、群集になるほど話題になり、人々の前で女性大蛇は虚空にのぼり、菩薩のすがたとなる。菩薩のすがたとなった女性大蛇は親鸞に礼拝する。すると、空より蓮華の花びらが舞い落ちる。この花びらの舞い落ちる奇瑞について、以下の通り描かれる。

此時虚空に五色の花ふりくだり、異香四方に薫じわたり……見る人奇異の思ひをなし聖人の法徳真宗の他力を驚嘆せずといふ事なし、中にも掃部は尊信し、渇仰のあまり其身神官なりといへども密に聖人を頂礼し弥陀の本願に帰命して更に二心なかりけり、かかりける程に群集の人々はいふに及ばず、遠近の者も聞伝へ聖人の徳行すぐれさせ給ふをしたひ奉り御教化を蒙り他力の宗門を尊重する者挙て算べからず[26]

ここに、「中にも掃部は尊信し、渇仰のあまり其身神官なりといへども密に聖人を頂礼し弥陀の本願に帰命して更に二心なかりけり」とある。掃部は、神社の神職であるにもかかわらず、親鸞を敬い、阿弥陀如来による救済を聞き喜ぶ。地域の主流である神祇信仰の主導者とされる神官が、親鸞を敬い阿弥陀如来を信仰するのである。こうした、他宗教の者である神官が浄土真宗へ回心するという物語の展開は、神祇信仰の人々を対象に、親鸞ひいては阿弥陀仏の魅力を伝えていることが考えられる。

以上、花見ヶ岡・蓮華寺に伝わる大蛇話を、(1)親鸞、水害を防ぐ、(2)女性の済度、そして(3)神官の回心という三つの場面について検討した。各々の場面において、真宗の魅力を伝えようとする意図が窺える。まとめると、以下の通りである。

(1)親鸞が水害を防ぐことを通して、念仏を拠り所とした生活を勧める。

(2)女性大蛇の嫉妬を通して、「蛇蝎心（執着心）」を伝えるとともに、大蛇を済度した「読経・称名」という法の力を讃嘆する。

(3)神官が浄土真宗へ回心することを通して、神祇信仰（他宗教）に対する真宗の優越性を示している。

三　坂東・報恩寺の縁起に伝わる大蛇済度譚

次に、坂東・報恩寺の縁起に伝わる大蛇済度譚について検討する。報恩寺縁起にも、大蛇済度譚が記されてあり、説話の構成は前に述べた蓮華寺に伝わる大蛇済度譚と共通するのだが、内容に多少の同異点がある。以下、前節と同じように各々の場面をみていく。

(1)性信、水害を防ぐ

坂東・報恩寺に伝わる説話は、水害を防ぐ主人公が親鸞ではなく、弟子の性信となっている。近世中期に刊行された『大谷遺跡録』には、

飯沼ト云テ広江有リ（中略）此沼ニ住ム悪竜人ヲ悩ス、性信名劔ヲエテコレヲオサム[27]

とある。原文によれば、性信は水害（悪竜）を「名劔」を用いて防いだ、と記してある。

性信が水害を防ぐ記録は、このほかにも存在する。例えば、弘化三（一八四六）年、宝福寺住職・豊仙筆の「上州館林伊豆山〈後又号大同山〉観音院宝福寺縁起」の説示には、

貞永元年秋七月、性信御房の化導を以て大蛇を鎮め、時の人頭骨を水神と崇む、夫より龍燈を揚る事今に

たえす[28]

とあり、性信が大蛇を鎮めたとある。この大蛇について、「頭骨を水神と崇む」とあることから、川の氾濫を鎮めたという意味で用いられていることがわかる。

さて、この「名劔」については、近世中期に刊行された『遺徳法輪集』と、後期に刊行された『二十四輩順拝図会』に、ともに報恩寺の寺宝として詳細に記録され、さらに、前に引用した『大谷遺跡録』と似た「水害を防ぐ物語」が記されてある。『大谷遺跡録』では「名劔」と呼ばれていたものが、『遺徳法輪集』には「御脇指」、『二十四輩順拝図会』には「竜返の宝剣」として記されている。『二十四輩順拝図会』には、

高祖聖人より性信上人へ附属の宝刀也、性信上人鹿島明神へ詣する道に霞が浦三又の渉りを船にて越給ふに俄（にわか）に風波雲を犯し雷電鳴はためき船すでに覆んとす船中の諸人大きに恐れ啼叫ぶ事限なし、性信上人思へらく是我懐中の宝剣を竜神得まく欲する故ならんと、即此宝剣を水中へ投じ給ふに忽雲晴風収りて船は難なく着岸せり、然るに下向中の船中又此三またを越給ふに忽蛟竜形をあらはし頭上に波宝剣を載て船端に来り性信上人に是を捧げける、性信希代の事にめで給ひ竜返の宝剣と号け給ふとぞ[29]

とある。ここに出る「蛟（みずち）」とは、蛇に似た想像上の動物であり、竜の一種であろう。『大谷遺跡録』説示の「悪竜」と同じ意味合いで、水害の象徴として描かれている。原文には、

性信上人思へらく是我懐中の宝剣を竜神得まく欲する故ならんと、即此宝剣を水中へ投じ給ふに[30]

とあるように、性信自身の思惑で、水中へ宝剣を投じ、水害を防いだという。このように、『二十四輩順拝図会』にて記される寺宝「竜返の宝剣」のいわれは、性信が、親鸞より附属された宝剣を用いて水害を防いだ、という話である。一方『遺徳法輪集』では、主人公が性信ではなく、性信の娘である性智となって、同様の話が記される。

性智比丘尼、鹿島一見ノタメニ三又ヲ舟ニテコサレシニ、風アラクシテ渡リカタキユヘニイカカハセント周章ラルルトキ、コノ脇指ソノママヌケテ水中ヘオチタリシカ、悪風タチマチニヤミ恙ナク着岸セラレタリ、性智比丘尼思ハレケルハ、大事ノ御脇指ヲ失シカサレトモ危キ命ヲ助カリシトヨロコヒ、鹿島ノコラス見物セラレ、下向又舟ニノリカヘラレシニ脇指ヲ大蛇ノ頭ニイタタキアケタリ、性智コレヲトリ大キニ悦レケリ、ソレヨリコノカタ蛇帰ノ脇指ト申スナリ[31]

先ほどの『二十四輩順拝図会』では、性信が自身の思惑で、水中へ宝剣を投じ、水害を防ぐ話であった。いま引用した『遺徳法輪集』では、「周章ラルルトキ、コノ脇指ソノママヌケテ水中ヘオチタリシカ」とあるので、性智が水害を防ぐために意図的に脇指を落としたというよりは、慌てふためいた反動で脇指が抜けて水中へ落ちたことになっている。しかし、結果的に性智の持つ脇指によって水害が防がれる。動機は違えども、性智が脇指を用いて水害を防いだことに変わりはなく、先の『大谷遺跡録』、『二十四輩順拝図会』と同様の意図が内包された説話であることがわかる。

このように、史料によって「名劔」「竜返しの宝剣」「脇指」というように表現が違えども、「水害を防ぐ効果があった」という神秘を伝えることによって、性信（あるいは性智）の法力を称賛していることが窺える。『大谷遺跡録』の場合、脇指は親鸞から附属されたものであるので、親鸞をも称賛していることになるといえよう。

ちなみに、『遺徳法輪集』で述べられる報恩寺の諸寺宝を比較すると、この「御脇指」の説明が圧倒的に長い。このことから、脇指を特段重要視していたことが考えられる。加えて、なぜここまで脇指の説明を大袈裟に語るのかについては、江戸時代に武士がいなくなった影響で、これまでの剣や刀の認識から変化していることが想起される。

以上、三つの史料に共通して、性信（あるいは性智）が宝刀を用いて水害を防ぐ話が説かれていることがわかる。

(2)女性の救済（回心）

『遺徳法輪集』には、性信が報恩寺を建立する場面が記してある。

サテ性信房此国ニテ念仏ノ法ヲ弘メマヒラセントテ再興ヲ企ラレケルニ、飯沼トイヘルトコロハ四方ノ景色スクレタルユヘコノ広沼ヲ埋テ仏閣ヲ建立シテ（中略）ソレヨリ性信房法延ヲヒラカレ毎日説法セラレシニ老若歩ヲハコヒ貴賤交（コモコモ）集レリ[32]

ここで性信は、阿弥陀仏の救済を伝えるために飯沼の地に報恩寺を建立する。すると、次第に多くの人々が性信の説法を聞きに集まるようになる。そのなか、ある一人の女性が寺を訪れる。

アル日一人ノ女キタレリ（中略）我身ハコノ沼ニスム主ナルカ御身コノ沼ヲ埋テ仏閣ヲ立タマフユヘ我スムトコロヲ失ヘリ[33]

女性はもともと飯沼に住んでいたが、性信が報恩寺を建立したせいで、住む場所を失ってしまったという。女性は、せめて門前の石橋下に住ませてくれと頼むのだが、性信はそれを断る。すると女性は、

イカレル眼クルメキテトカクノ返リコトナク忽チ大蛇トナリ[34]

とあるように、住む場所が返ってこないことがわかった途端、自らの住まいへの執着心から、たちまち大蛇となる。蓮華寺の説話と同様に、女性が執着心によって大蛇に化けるという展開は、親鸞の「蛇蝎」観との関係が示唆される。

また、女性大蛇は、「常陸国三又トイフ所へ去ケル」とあるように、常陸国三又という場所へ去っていく。

この「三又」という地は、のちに記される「御脇指」の寺宝に出てくる地名と同一であることは注目に値する。先に述べたように、『遺徳法輪集』にて記録される「御脇指」の説明には、

性智比丘尼、鹿島一見ノタメニ三又ヲ舟ニテコサレシニ、風アラクシテ渡リカタキ[35]

とはじまり、性智が三又を通った時に、突然天候が荒れる。三又とは、先ほど女性大蛇が怒って去っていった地である。つまり、性智を襲った水害は、性信の報恩寺建立によって住む場所を奪われた女性大蛇の可能性が高い。

この水害は、性智の脇指の力で鎮まるのだが、帰りの航海中、大蛇が刀を性智へ捧げ返す場面がある。

下向又舟ニノリカヘラレシニ脇指ヲ大蛇ノ頭ニイタタキアケタリ、性智コレヲトリ大キニ悦レケリ、ソレヨリコノカタ蛇帰ノ脇指ト申スナリ[36]

これは、大蛇が英雄として登場しているのではなく、むしろ水害で苦しめた女性大蛇が反省して刀を差し出していると考えられる。換言すれば、女性大蛇の回心をあらわしているといえよう。同時に、性智の持つ脇指の力に圧倒された大蛇を描く事によって、その脇指が称賛されている。

このように、女性はいったん住む場所を失ったことが原因で大蛇と化すが、最終的には宝刀（脇指）の力によって大蛇の怒りが鎮まっていることがわかるのである。

(3)神官の回心

『遺徳法輪集』には、性信と翁との会話の内容が記されている。

翁説法ノ終ツル跡ニタダ一人ノコリ性信房ニ告テイハク、我ハコレ飯沼ノ天神ナリ（中略）コトサラ希有ナル弥陀ノミノリヲ弘ラレメヅラシクウレシク思ヒ毎日コノ道場ヘ詣テ聴聞イタシサフラフユヘ、歳久シ

ククルシミシ寒熱ノ憂ヲ忘タリ、コレスナハチ御身ノ鴻恩ナリ[37]

性信の説法を聞く翁の正体は、飯沼天神の化身であるという。飯沼天神の化身は、性信の説法を称賛し、阿弥陀仏の力によって飯沼天神の「寒熱の憂」が消えたことに感謝する。続いて、

今ヨリ後ハ御身ハ我師ナリ我ハ御身ノ弟子ナリトテ性信房ヲ拝ミテカキケシウセニケリ[38]

とあるように、飯沼天神（翁）は、性信を自らの師匠として仰ぎ、性信の弟子となって姿を消す。

このような飯沼天神（翁）と性信とのやりとりから、念仏者でない者が、浄土真宗に回心していく伝道的展開がみられる。

のち、翁は毎朝御手洗の池辺りにある杉の木から、横曽根に集まる念仏者たちの方角へ礼拝する。その翁の礼拝すがたを、飯沼神社の禰宜によって目撃される。禰宜が翁の後を追うと、「天神ニテオハシマス（天神様がおいでになる）[39]」と述べ、その杉の木に「注連（注連縄）[40]」を貼り「伏拝堂[41]」と名付け、大切にする。翌年、天福元（一二三三）年正月十日に、禰宜は天神の夢告を以下のようにうける。

横曽根ノ性信房ハ済度ノ舟ヲ飯沼ニ汎ヘ流転ノ郡類ヲ救ルルナリ、コノユヘニ我モマタ師弟ノ契約シ師恩ヲ重スルカユヘニ毎朝礼拝スルナリ、コレニヨリテ青陽ノ嘉物トシテコノ社ノアランカキリハ今年ヨリ御手洗ノ鯉魚ヲ性信房ヘ送ルヘキナリ、ユメユメコノコト違フヘカラスト告タマヘリ[42]

この夢告を聞いた禰宜は、続いて「サテハ性信房ハタダヒトニアラストテ尊重ノ思ヒヲナシ、サラハ夢ニマカスヘシ[43]」とあるように、禰宜が性信を尊敬する様子が記される。禰宜は夢告にまかせ、御手洗の池に網をひき鯉魚を二匹揚げ、報恩寺・性信のもとへ持って行く。性信はこれを聞き、「サテアリカタキ垂迹ノ御方便カナ、コレスナハチ聖人ノ御勧化アマネク濁世末代ニオイテ利物偏増シタマフ験ヨ[44]」と大いに喜ぶ。性信は、天神を弟子とすることは恐れ多いが、だからといって天神の示してくださった行いを卑下することもまた失礼に

値することを理由に、天神の仰せ通り、鏡餅一重を鯉魚の入った「かます」に納め、禰宜に渡し天神へ捧げる。[45]

このように、飯沼天神が性信の説法によって弟子となり、禰宜は天神の仰せを受けてまた帰依していくことが記されている。これは、飯沼天神や禰宜が浄土真宗を回心した、という物語の展開と考えて良いだろう。そうであるならば、この箇所も、蓮華寺説話の三番目と同様、他宗教である神祇信仰を対象に、真宗の魅力を伝えている過程が窺える。

以上、坂東・報恩寺に伝わる大蛇話を検討した。検討の結果、本説話においても、各々の場面において真宗の魅力を伝えようとする意図がある。まとめると、以下の通りである。

(1)性信（あるいは性智）が真宗の宝刀を用いて水害を防ぐということを通して、仏力が説かれている。

(2)さらに、その仏力によって、蛇のような執着心を持つ女性も回心することが描かれている。

(3)飯沼天神や禰宜が浄土真宗へ回心することを通して、神祇信仰（他宗教）に対する真宗の優越性を示している。

おわりに――展開と実践例

以上、本研究にて、近世東国に位置する真宗寺院にて説かれた「大蛇済度譚」の伝承が、当時の寺院訪問者にとってどのような影響を及ぼしているか考察した。これまで歴史学の見地のみでしか扱われなかった大蛇済度譚は、過去の真宗伝道の実践事例の一つであることが明らかとなった。

近世の大蛇済度譚について詳細に語られている花見ヶ岡・蓮華寺と、坂東・報恩寺との両説示を比較検討し

てみると、説話の内容に異同がみられる。大きな相違点を挙げると、①主人公②水害の場所③大蛇変化理由④救済方法⑤大蛇の結末である。一方、両説話の共通点は、①水害を防ぐ物語であること、②女性が救済されること、そして③神祇信仰者が回心することが記されている点である。各々の段を詳細に検討していくと、それぞれの場面において、真宗の魅力を伝えようとする意図が窺える。まとめると、以下の通りである。

花見ヶ岡・蓮華寺

(1)親鸞が水害を防ぐことを通して、念仏を拠り所とした生活を勧める。

(2)女性大蛇を通して、「蛇蝎心（執着心）」を伝えるとともに、大蛇を済度した「読経・称名」という法の力を讃嘆する。

(3)神官が浄土真宗へ回心することを通して、神祇信仰（他宗教）に対する真宗の優越性を示している。

坂東・報恩寺

(1)性信（あるいは性智）が真宗の宝刀を用いて水害を防ぐということを通して、仏力が説かれている。

(2)さらに、その仏力によって、蛇のような執着心を持つ女性も回心することが描かれている。

(3)飯沼天神や禰宜が浄土真宗へ回心することを通して、神祇信仰（他宗教）に対する真宗の優越性を示している。

こうした説話が当時の布教現場で広く語り継がれることで、その地域の人びとに強く印象を与えたことが窺える。謂わば定番の布教伝道のスタイルとして、各地で実践されてきたのであろう。

なお、大蛇済度譚に登場した蓮華は、茨城県下妻市下妻乙光明寺の寺宝「黒蓮華」などとして現存している。蓮華の現物が現在まで残っていることは、この説話が寺院関係者の重要なものとして語り継がれて来た一つの証拠であり、その伝承が一定の意義を持つものであったことを示しているともいえよう。

本研究では、近世東国における伝道実践の具体的展開について考察する点に終始し、それを踏まえて伝道の理論を構築するまでは至らなかった。今後は、他の個別事例を検討・蓄積し、将来的にそれらを分類していく方法が適切と考えられる。これについては今後の課題としたい。

註

（1）深川宣暢は、真宗伝道学の体系を構築するために真宗教義の上から伝道学を位置付け、その基礎的方法を定めている（深川宣暢「真宗伝道学方法論の考察―真宗教義と伝道学の方法―」『真宗学』一一九・一二〇合併号、二〇〇九年）。また、最近では、真宗伝道の体系化を試みた研究成果も出始めている（奥田桂寛「真宗伝道学体系の一試論」『印度學佛教學研究』六三号、二〇一五年）。

（2）深川宣暢、前掲「真宗伝道学方法論の考察―真宗教義と伝道学の方法―」など。

（3）長岡岳澄「「伝道」と「自信教人信」の関係」（『宗学院論集』八一号、二〇〇八年）など。また、加茂順成は、方法論について多くを論述しているわけではないが、「現に社会を関わっている事実の中から帰納的に理解することも必要であろう」という視点から考察を行なっている（加茂順成「自信教人信一考―教団の声明分析による帰納的理解―」『印度學佛教學研究』六一号、二〇一三年）。

（4）以下、本研究で用いる「念仏者」とは、「仏願の生起本末を聞信し他力信心をえた者」と定義する。他力信心をえて阿弥陀如来の慈悲を受容し讃嘆する者のことを意味する。

（5）いかに伝道が成立しているかどうかの判断を、他力信心の獲得に求めるならば、それは衆生の判断の範疇ではなく、覚者の範疇である。しかし、人が念仏をよろこぶすがたや、寺院に群集する様子、あるいは人が寺院を大切に護持する歴史などを通して、一定の伝道成果を知ることはできると考えられる。

（6）上山大峻「真宗伝道論」（『教学研究所紀要』七号、一九九九年）

（7）基本的に、東国における親鸞の有力門弟、あるいはそのゆかりの寺院を二十四輩という。

（8）伝承とは、人々のあいだで古くから伝わる信仰や習俗などを承けて、後世へ伝えていくことである。伝承文学、口承文学

などとも言われる。小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』（小学館、二〇〇二年）や、柳田邦男監修『民俗学辞典』（東京堂出版、一九五一年）に詳しい。

(9) 塩谷菊美『語られた親鸞』（法藏館、二〇一一年）

(10) 草野顕之『親鸞伝の史実と伝承』（『龍谷史壇』一三七号、二〇一三年）

(11) 大澤絢子「親鸞像の形成と展開過程」（近日公開）

(12) 末木文美士『親鸞』（ミネルヴァ書房、二〇一六年）

(13) これは、談義本が研究対象となりにくい研究史とも重なる。関山和夫『説教の歴史的研究』（法藏館、一九七三年）、一頁にそのことが述べられている。

(14) 今井雅晴『親鸞の伝承と史実―関東に伝わる聖人像―』（法藏館、二〇一四年）など、多数。他に、塩谷菊美も「『東国』の親鸞の発見」という枠組みで考察をしている（塩谷、前掲『語られた親鸞』。）

(15) 柏原祐泉、千葉乗隆、平松令三、森龍吉『真宗史料集成』八（同朋舎、二〇〇三年）参照。以下、本史料を『集成』と表記する。

(16) 今井雅晴『下野と親鸞』（自照社、二〇一二年）など。

(17) 『集成』八、九五〇頁。

(18) また、東には「姿川」と称される別の川が流れているが、これについての言及はない。

(19) 『集成』八、九五〇～九五一頁。

(20) 今井雅晴『五十三歳の親鸞―下野国への布教―』（「関東の親鸞」シリーズ⑦、真宗文化センター、二〇一二年）、四三頁。

(21) 『集成』八、九五三頁。

(22) 『集成』八、九五一頁。

(23) 『集成』八、九五一頁。

(24) 『浄土真宗聖典全書』二（本願寺出版社、二〇一二）五一八頁。

(25) 『集成』八、九五二頁。

(26) 『集成』八、九五二頁。

(27) 『集成』八、七〇〇頁。

(28) 今井雅晴「性信房関係史料」(『茨城大学人文学部紀要 人文学科論集』第一九号、茨城大学人文学部、一九八六年)五七頁～五八頁。
(29) 『集成』八、八四七頁。
(30) 『集成』八、八四七頁。
(31) 『集成』八、六三九頁。
(32) 『集成』八、六三五頁。
(33) 『集成』八、六三五頁。
(34) 『集成』八、六三六頁。
(35) 『集成』八、六三九頁。
(36) 『集成』八、六三九頁。
(37) 『集成』八、六三六頁。
(38) 『集成』八、六三六頁。
(39) 『集成』八、六三六頁。
(40) 『集成』八、六三六頁。
(41) 『集成』八、六三六頁。
(42) 『集成』八、六三六頁。
(43) 『集成』八、六三六頁。
(44) 『集成』八、六三六頁。
(45) 以来、現在にいたるまで、この鯉魚の作法「俎(まないた)開き」は、毎年一月十二日、浅草報恩寺にて恒例儀式として行われている。

(武蔵野大学仏教文化研究所研究員(専門)真宗学)